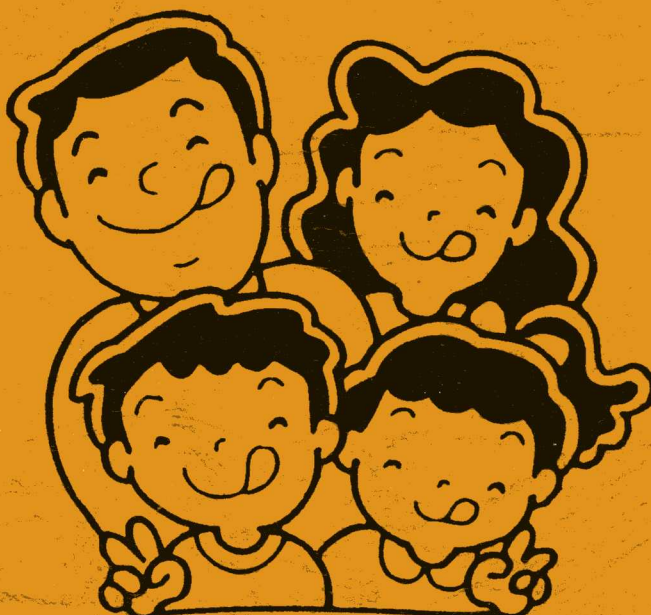


令和4年度



青少年の主張

★伸びよう 育てよう 羽後の青少年★



よその
うちの
社会の **子。**

彼らもうすぐ立派な
社会人。
うちの子も、よその子
も共に明日を築くパー
トナーです。

青少年育成羽後町民会議

いつか握手を取り戻すときに

青少年育成羽後町民会議

会長 沼澤晴夫

小学校で学級担任をしていた昭和の終わり頃の話です。ズボラな自分ゆえ、毎日必ず全員に声をかけるということを忘れないために一つの方法を考え付きました。帰りの会の挨拶が終わった後に、一人一人と握手をすると決めたのです。もちろん授業中や業間等に気軽に触れあっていたつもりでしたが、今風に言えば、その決まり事を一つのセイフティネットのように考えていたのです。手前味噌ながら、一定の効力として機能していたように思い出せます。

さて、私達がコロナ感染予防のために「握手」行為を失ってからもう三年が経とうとしています。握手の起源は、「武器を持つていない」という証拠に右手を開いて差し出すことから始まったという説があります。その言に倣えば私たちの手はまだ、危険なモノにまみれているのかもしれない。それを消すために、この後何度消毒液を吹きかけたらいいのでしょうか。また世界に目を向ければ、今はどうしても握手できない状況を持つ国同士の存在が頑なさを増し、我が国も他人事として観ていることは困難になってきています。

青少年が健全に育ち社会を背負っていく存在として独り立ちするためには、他者理解と協調の精神は欠かせません。それを身体行動として具現化する握手という行為は、グータッチや肘を使った接触などに代替されています。もちろん我が国が大切にしてきたお辞儀、それから万国共通に近い笑顔など、身体を使ったコミュニケーション手段はまだまだ多くあり、それらを含めて上手に活用すべきでしょう。しかしやむを得ないと考えつつも、握手の持つ暖かみや強弱に込められた心の表現が、今ことさらに懐かしく貴重に思えてなりません。

コロナ感染予防対策は、国ごとの対応レベルに違いが生じてきて、迷いつつ進んでいる状態と言えます。正直、いち早く脱したいと逸る気持ちを消すことはできません。しかし拙速な動きが取り返しのつかない未来につながる危険があるとすれば、理性的な判断は依然として強調されるべきでしょう。その状況を踏まえつつ、握手の持つコミュニケーション特性をどう発揮するか。単純ですが、それは一つ一つの挨拶行為に「心を含める」ことではないでしょうか。心を含めて言葉を発し、心からの笑顔を送る・・・そうやって他者へ思いと温かい気持ち伝えていくしかありません。目に見えなくともそういうコミュニケーションが続けば、いつか私達が握手を取り戻したときに、より一層心の通い合う行為として機能するのではないのでしょうか。辛抱強く向き合いたいものです。

今年も小学生から高校生まで、それぞれ心を込めて書かれた作品が揃いました。各年代によって、テーマが家族、地域社会、学校そして国全体や世界・・・様々な場への広がり、深まりが感じられる冊子となりました。どうか最後までご精読いただき、青少年の現在を理解しながら、困難な時代の子育て、教育のための参考にしてほしいものです。

終わりに町当局、教育委員会、応募された各学校をはじめ多くの地域の皆さんに感謝申し上げます、巻頭の言葉と致します。

